

今月のみことば 2017年1月

「さあ、来たれ。論じ合おう」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」

(イザヤ書 1章18節)

石井藤吉という極悪の犯罪人がいた。前科十数犯、47年の生涯のうち何と在獄20年余、盗み、傷害、殺人、強姦、脱獄を繰り返した。

しかし、収監されていたある時、自分が犯した殺人事件で別人が逮捕されたことを知り、その無実の男が気の毒でたまらなくなった。「人間はどうせ一回は死なねばならぬから、自分はここで速やかに自首してその人を助けてやらなければすまぬ」と思い、自首を決意。真犯人である、と名乗り出て、冤罪を未然に防いだ。

ところが、その後、永遠について考え、毎晩恐怖を覚えるようになる。無理もない。これだけの罪を犯したのである。行き先は地獄以外にどこがあろうか。

そんな中、雨の日も風の日も絶えず監獄を訪問し、何かと親切に相談相手となり、慰謝者となり、熱心に救霊の道を説く二人の外国婦人がいた。キャロライン・マクドナルドとアニー・ウェストという宣教師である。

二人は藤吉に正月料理と新約聖書、キリスト教の本数冊を差し入れた。1916年元旦のことであった。

思いがけないこの訪問に、さすがの藤吉も驚き、初めは疑いながらも聖書を読み始めるうち、次第に心が惹かれていった。特に、九十九匹の羊を野においてまで、一匹の迷った羊を探すと羊飼いの姿には感動すら覚えた。

さらに読み進めるうち、ある日、ルカの福音書23章34節に至った。藤吉は「五寸釘を打たれたような」衝撃を受けた。そこにはこう書いてあった。

「そのとき、イエスはこう言われた。『父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです』」。

藤吉の中で大きな変化が起きようとしていた。藤吉は恐る恐るキリストに心を開いた。すると藤吉に、今までの不平不満に代わって、感謝の心が生まれてきたのである。そればかりか、刑務所の運動場の片隅に咲く菊がいったん枯れたように見えたのに、時期が来て咲くのを見て、不滅のいのちを素直に信じることができた。

ついに死刑執行の日は来た。

藤吉の辞世の句が残っている。

「名は汚し 此身は獄にはてるとも 心は清め 今日都へ」

わずか一年数か月の信仰生活であった。しかし「魂の生みの親」である彼女たちに励まされて藤吉が獄中で書いた手記は、藤吉の死後、マクドナルドが英訳しニューヨークで出版されて大評判を呼び、世界的聖書学者として名高いウィリアム・バークレーの目にも留まった。

バークレーはそのマルコ伝注解の中でこう記している。

「死刑宣告を受けたその男を絞首台に連れ出しに来た看守が見たのは、それまで思っていたような気むずかしい、無情な人非人ではなく、ほほえみを浮かべた輝かしい人間であった。殺人者イシイは生まれ変わっていたのである」。

